

お早うございます。

今日の福音書の冒頭に「その頃」としてあります。これはどのような「時」を指しているのでしょうか。まず、この頃は、洗礼者ヨハネがイスラエルの人々に悔い改めの洗礼を受けるようにと、声高く呼びかけていた時です。ある神学者は、この洗礼者ヨハネについて「電話交換手」のような存在であると言いました。今は殆ど無くなりましたが、かつては、例えば国際電話をかけると、最初は自分と交換手が繋がります。そしてしばらくすると、向こう側の相手と繋がります。こうなりますと、交換手の役割は終わります。こちらとそちらとで直接繋がって話し合うようになります。このように、洗礼者ヨハネは、イエス様と人々の仲介役だった、ということです。人々は、これからは、間に立って繋いでくれるリンカー、預言者なしに、直接イエス様と会えるようになります。こういう意味では、「その頃」というのは、大きく時代や歴史が変わる頃、変わり始めた頃となります。今までの時代と違って、新しい時代が幕を開ける、というとても重要な時を指しています。

そして「その頃」は、いよいよ洗礼者ヨハネの時代は終わりかけていて、イエス様の時代に変わる時でもあります。「その時歴史が動いた」という、有名なNHKドキュメンタリー番組がありますが、まさにその通りで、この時、イエス様が洗礼を受けて、水の中から上がると「天が裂け」ました。天が裂けて大きく開かれるということは、神様が世界の歴史に介入する、入ってくることを意味します。つまり、今までとは違って、イエス様を通して天と地が繋がる新しい時代が始まっていることを表しています。これは、キリスト教の最も大切な特徴が現れていることです。天と地が繋がる、神様のみ旨と世界が繋がるというのが、キリスト教の中心的な告白であります。そして、その中心に主イエス・キリストがおられます。この時、イエス様が聖霊の降臨をご覧になった時、天から声が聞こえます。「わたしの愛する子、わたしの心に適う者」。これは、全ての親の、子どもに対する望みですね。心に敵う者！中々のことでしょう。私達も、是非、神様のみ旨に適う者になりますように願います。

ところで、神様は、このイエスを荒れ野に導かれます。既にみ心に適う者として認められたのに、なぜ荒れ野の試練とサタンからの誘惑に導かれたのでしょうか。ある意味、これは私達の信仰生活のパターンにも通じる所があります。洗礼を受けて、神の民として生まれ変わった後も、日々の生活の中では、様々な誘惑に遭うのが現実です。恐らくイエス様が受けられた誘惑やテストも、そういう意味があることでしょう。聖書で言う荒れ野は、実際に何も無い砂漠のような場所、物理的な場所ではなく、シンボルです。「神に敵対する力が住む場所、人間の命を脅かす混沌するところ」を意味します。ですので、荒れ野は、時にはある特定の場所にもなりますし、或いは人間の心や魂の状態にも成り得ます。例えば、あれかこれか迷うとき、善と悪との間で彷徨う時、人間は荒れ野に置かれたこととなります。迷いの領域を超えて、何か罪を犯して喘ぎ悶えている時、人間の心はまるで地獄のようにもなります。つまり、荒野は、私達の人生の中に、どこにも存在するものです。外にありますし、中にもあり得ます。これに打ち勝つために、私達には荒れ野が与えられます。イエスの荒れ野での誘惑で、イエス様が試されたのは、これからの宣教のやり方だったでしょう。力の使い方も悩みの中心だったと思います。

マルコ福音書は、イエス様の誘惑の40日間、野獣と一緒におられたと書きました。マルコは、旧約聖書イザヤ書を念頭において考えたでしょうか。イザヤ書第11章の言葉、これは黒人人権運動のマルチング・ルターもワシントン演説で引用した言葉ですが、こうあります。「狼は小羊と共に宿り、豹は子山羊と共に伏す。子牛は若獅子と共に育ち、小さい子供がそれらを導く。牛も熊も共に草をはみ、その子らは共に伏し、獅子も牛も等しく干し草を食らう。乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ、幼子は蛇の巣に手を入れる。わたしの聖なる山においては、何ものも害を加えず、滅ぼすこともない。水が海を覆っているように、大地は主を知る知識で満たされる。」如何でしょうか。イザヤ書のこの部分の小見出しは「平和の王」となっています。つまり、イエス様は、今までの時代とは違って、今までの支配者たちと違って、力で世界を支配するのではなく、愛を持って、和解と一致を作るために来られたことが宣言されています。イエス様には、平和をもたらす使命を改めて肝に銘じる期間として荒れ野での誘惑が与えられた、と言うのです。

イエス様の40日間の試練と誘惑に因んで、キリスト教はこれから復活節を迎えるまで40日間を大齋節として過ごします。イエス様のように、例えば高野山に籠ったり、鳥取砂丘にテントを張って40日間過ごせ、と言うものではありません。この期間中、私達も、自分ならではの、各々の荒れ野に居続けましょう。そして、平和のために用いられる者となりますように、自分を顧みながら、同時に私たちが住んでいるこの世界を顧みて、和解と一致、平和をもたらすための働きを模索する貴重な時間として過ごしたいと思います。